知と心と地域を結ぶ● Iwate Prefectural University――――岩手県立大学広報紙

IPU·33

産直パワーの∞

無限大

ここは紫波町東部、国道396号沿いの「産直センターあかさわ」。ソフトウェア情報学部・菅原研究室のフィールドの一つです。

「産直の運営にITを」と、共同プロジェクトが進行中。情報配信のWebシステム、タッチパネル式の入荷管理システム、そしてレジスターと連動する売上管理システムの3本立てです。

それぞれの構築、運用テスト、統合実験を経て消費者へのアピール・販売促進プランの展開・経営情報の活用が一元的に図られます。農業生産者が担う流通チャネル、産直の競争力アップにもIPUの頭脳は欠かせません。

産直センターあかさわ
（組合長／作山幸三さん＝後列左）
の皆さんと、
菅原研究室のプロジェクトメンバー

IPUカレンダー

キャンパス彩

オノエヤナギの枝

小さな花穂（かすい）が点々と並びます。
つやつや光って見えるのは、
銀色の短い絹毛。
「オノエヤナギ」と思われる枝先が、
空へ向かって伸びていました。
ますます日脚が長くなる早春の候、
調整池の水際で。

4月
- 4日●入学式［四大・大学院・盛岡短期大学部］
- 5日●新入生オリエンテーション
- 6日●入学式［宮古短期大学部］
- 9・10日●新入生オリエンテーションキャンプ［宮古短期大学部］
- 11日●前期授業開始
- 12日●前期授業開始［宮古短期大学部］

6月
- 19日●開学記念日
- 中旬～7月上旬●東北地区大学総合体育大会

7月
- 上旬●大学説明会
- 8日●キャンパス見学会［宮古短期大学部］

ニュース・リリース

第3回「日本褥瘡学会 東北地方会」学術集会

全国7地区で地方会を開催している日本褥瘡学会。このほど、岩手で学術集会を開催します。さまざまな見地から、より発展的な研究・予防・治療の実践に結びつく機会です。

※会長／武田 利明（看護学部教授）
- ●と　き／5月26日(土) 13:00～
- ●ところ／岩手県立大学
- ●メインテーマ
  「褥瘡対策
  ―新たな取り組みを目指して―」

※参加費　会　員　2,000円
　　非会員　4,000円
　　学　生　1,000円

■教育講演
「座位での褥瘡予防―あらためて座位姿勢を見直す―」
田中 秀子氏
［日本看護協会看護教育研究センター看護研修学校］

■特別講演
「車いす上での高齢者の褥瘡予防ケア」
廣瀬 秀行氏
［国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所］

■応募による一般演題発表

お問い合わせ先
●第3回「日本褥瘡学会　東北地方会」事務局
…岩手県立大学看護学部内
E-mail／tohoku3@ml.iwate-pu.ac.jp
Fax／019-694-2201

リエゾン　LIAISON

3月20日（宮古短期大学部）及び23日（四大部、盛岡短期大学部、大学院）の学位記授与式が行われ、卒業生が社会へと巣立っていきました。実学実践の理念の下で本学で学んだことなどをいかして、卒業生一人一人がそれぞれの社会で活躍してくれることと期待しています。これからの職場や地域社会において、大学に相談したいことなどがあった場合は、いつでも本学を訪ねてください。卒業生の一人一人が、地域社会と岩手県立大学を結ぶ“Liaison”です。（小野寺）

［教員人事］

退職者［平成19年3月31日付］

●副学長	太田原　功
●看護学部 教授	天野　洋子
●看護学部 教授	石井　トク
●看護学部 教授	兼松百合子
●看護学部 教授	坪山美智子
●看護学部 教授	横田　碧
●社会福祉学部 教授	菊池　章夫
●社会福祉学部 教授	野村　豊子
●社会福祉学部 教授	福田　素生
●総合政策学部 教授	徳久　勲
●盛岡短期大学部 教授	高橋富士雄
●教育・学生支援本部 教授	大塚　剋佳
●看護学部 助教授	佐々木典子
●ソフトウェア情報学部 講師	後藤　幸功
●共通教育センター 講師	高野　泰志
●看護学部 助手	荻野　大介
●看護学部 助手	千葉　香織
●総合政策学部 助手	南島　和久

採用者［平成19年4月1日付］

●看護学部 教授	伊藤　收
●看護学部 教授	竹﨑登喜江
●看護学部 准教授	似鳥　徹
●看護学部 助教	齋藤　貴子
●看護学部 助手	高橋司寿子
●社会福祉学部 准教授	咲間まり子
●社会福祉学部 准教授	藤田　徹
●社会福祉学部 准教授	細田　重憲
●社会福祉学部 講師	渡辺　道代
●社会福祉学部 助手兼実習講師	阿部　明子
●社会福祉学部 助手兼実習講師	吉田　友香
●ソフトウェア情報学部 教授	若林　光次
●ソフトウェア情報学部 講師	佐藤　永欣
●総合政策学部 教授	田中　信孝
●総合政策学部 教授	吉本　繁壽
●総合政策学部 講師	来田　但馬
●総合政策学部 講師	見市　建
●総合政策学部 講師	山本　健
●共通教育センター 准教授	天野　哲彦
●研究・地域連携本部 教授	倉林　徹

あなたの声を

本学の広報紙「IPU」の紙面づくりに参加しませんか。記事に関する感想や意見、投稿、さらに本学への質問など内容も形式も問いません。FAXまたは電子メールで随時、受け付け中です。

IPU·33
発行／2007年3月31日
公立大学法人
岩手県立大学
研究・地域連携室
〒020-0173 岩手県滝沢村滝沢字巣子152-89
TEL／019-694-3330・FAX／019-694-3331
URL／http://www.iwate-pu.ac.jp/ e-mail／info@ml.iwate-pu.ac.jp

農産物の流通チャネルは進化する

紫波町「産直センターあかさわ」とのプロジェクトを進める ソフトウェア情報学部・菅原研究室の指向と実践

経営革新を求める心

今や、地域資源の一つとして欠かせない存在。また自主・自立の精神で運営され、農業生産者みずからの意思決定に基づく流通チャネル。こう位置づけられる産直が、情報技術の投入効果で消費者へのアピール度を高めようとしています。

「みんなの産直は、どう在るべきか。120名あまりの組合員に共通する思いです。売るための仕掛けづくり、経営体質強化に向けてシステムの導入が検討されていました。昨年7月、地元の紫波町が県立大学と包括協定を結んだのが大きな契機で、アイデアやノウハウを提供していただく道が開けたというわけです」（作山幸三組合長）

現場に学ぶ学生たち

タイムリーかつ具体的な対象とテーマを地域の現場へ求め、ニーズに応えようと動き出したのがソフトウェア情報学部の菅原研究室です（ソフトウェア設計・経営情報システム）。竹野健夫助教授、堀川三好講師の呼び掛けで、プロジェクトのメンバーに学生が加わりました。

「やるからには主体性を発揮せよ、と強く求めています。学外とコンタクトして研究を進める実践指向が原動力です。問題発見から問題解決へのプロセスをリアルに体験して実務能力の涵養に結び付ける、という目的意識を高めてほしい。技術的にオーソドックスな案件ですが取り組むべき必然性を見出し、一連の成果を現場へフィードバックしていきます」（堀川講師）

情報システムの「ツボ」

産直へ出向いてヒアリング・打ち合わせを重ね、システムの構成要素が決まりました。それぞれの機能が明確化されるとともに、連動して使う状況への対応、将来的な機能の拡充も視野に入れています。

- **消費者・組合員向けWebアプリケーションシステム**／ホームページを開設し、インターネットで情報を発信。更新も容易に。旬の味覚の数々、生産者のメッセージとプロフィール、イベントなどをアピールしてマーケティング効果を高めます。
- **入荷管理システム**／大きめの文字や数字が並ぶタッチパネルを押すだけの易しい操作で、商品ラベルを発行。作業負荷の軽減、効率化を図ります。また入荷情報の記録・蓄積を行うことで今後の栽培に活用します。
- **売上管理システム**／売上・在庫の状況を、組合員がパソコンや携帯電話でチェックできます。POS（販売時点情報管理）レジと連動して売れ行きを予測したり、出荷・補充のタイミングを計画的に判断したりするのに用います。

産直センターあかさわとの共同プロジェクトがマスコミへ公開されたのは1月25日、メディアセンターのコンピュータ演習室にて。引き続き、システムのユーザーである組合員へのパソコン講習が行われています。

ホームページを1月下旬から公開中。3月1日には、入荷管理システムの運用テストが行われました。ポンポン、と軽くタッチパネルを押す使い勝手の良さに、組合員は納得顔です。そして4月半ばには入荷管理システム・売上管理システムの連動実験が予定され、いよいよ6月からは本格的な運用が始まります。

実務の場面を想い描いて

システムは、現場の人が実務で活かすことを見越して創られなければなりません。研究のための研究ではなく、具体的な声、ある特定の使用目的に対して明確な答を示せるレベルの研究を継続させる。こうしてモチベーションを高めているのが、博士前期課程1年の半澤幸恵さん。

「まず、農業とITとのマッチングを図ろうと考えました。その切り口の一つとして着目したのが、農産物の生産現場と結びついている産直の情報システム化です。さまざまな商品、業務の特徴など相手先を多面的に理解して全体像を捉え、システムを立ち上げるよう気を配りました。求められるのは、まさにSE（システムエンジニア）的な感性と論理性と構想力です」

現場と関わった成果を、卒業研究へ結実させた4年生も。荒井円さんは、システム統合への端緒となるデータ収集プロセスを担当してWebアプリケーションを作成。産直ポータルサイトの必要性、メディアとして求められる要件、技術的なポイントなどを論じました。また立柳賢恵さんは、入荷管理システムのコンセプトづくり、簡便なインタフェースの実現に貢献したほか、売上管理システムとの統合モデルを構築する工程に携わっています。

パソコン講習の風景

生産者にシステムを説明

店内で販売品を調査

産直センターあかさわ

正式名称は「農事組合法人 赤沢農産物直売組合」。昭和60年9月の設立で、岩手県内で2番めにオープンした産直施設。道の駅「紫波」と併設される現在地で平成10年4月から営業。年間の売り上げ約2億円の50%以上を、リンゴとブドウが占める。

もっと、地域づくりにITを

アイシーエスとの連携で貢献への新機軸

企業との間では初めてとなる包括的連携協定が、㈱アイシーエスと結ばれました。

締結式は1月16日、本学にて。アイシーエスの郵野（むらの）善義社長、本学学長・谷口誠は協定書に署名した後、握手を交わして決意と希望を表しました。

さまざまな分野に渡る地場の中小企業をはじめ、医療・福祉・農林水産・環境・行政など社会分野の各方面で、複雑多様化する実践課題の解決に向けて情報化のニーズが高まっています。こうした時代の流れを捉え、ソフトウェア情報学部が擁する人材・ノウハウ・研究成果を多面的に活かす形で、県内IT業界をリードするアイシーエスとのプロジェクト指向は深まっていきます。

さらに、看護学部・社会福祉学部・総合政策学部の教育研究においてもITは不可欠で、さまざまな取り組みの社会還元を図る際、ITの活用が基幹要素となるケースが少なくありません。

行政系を中心に多くの実績を持つアイシーエスとの幅広い連携を通し、地域に根ざす本学の学際性、オリジナリティーが打ち出されます。ITに関する基礎研究と応用研究、現場のニーズに応えるソフトウェア開発とシステム構築、そしてサービスメニューの深化へと段階は進みます。

また、人材育成に向けた取り組みが本格化する見通しです。プロ志望の学生に実践プロジェクトへの参画を促したり、情報通信に携わる技術者の能力開発を進めたりして人的資源を育み、業界の活性化とレベルアップを図る方針が掲げられています。

IT振興の波及効果を限りなく広めるため、市町村・企業・各種団体との横断的な結びつきを重視する点も特徴です。「地域のためにITで、いろんなことを」。この趣旨に賛同する皆さんと歩調を合わせ、さまざまな価値を追求します。

やすらぎ、健やか、安心を叶えたい

二戸地区をフィールドに、保健福祉の明日へ向かって

より充実した保健福祉の実現に向け、価値ある一歩。本学は、二戸地区広域行政事務組合（管理者＝稲葉暉／二戸町長）と相互連携協定を結びました。

1月30日、二戸市シビックセンターで協定書への署名など締結式が行われています。一戸町・二戸市・軽米町・九戸村が構成する同組合との間では総合的な福祉環境システムの構築と運用を図るため、有機的かつ重層的な取り組みが展開されます。「視野は広く、揺るぎないパートナーシップを培って地域を見つめ、できることから着実に進めましょう」と、谷口学長は満席の会場で語りかけました。

具体的な構想として●介護予防事業の実施、その効果測定●高齢者の生活介護に関する意識調査●保健福祉活動に焦点を当てる研修会・セミナー●ユニバーサルデザインの勉強会●実習生（学生）の受け入れ、が挙げられます。地域住民の健康・福祉の増進、そして福祉分野における教育・研究活動。それぞれが成果を挙げ、結びつきを深めます。

「地域保健福祉活動と地域づくり」と題して記念講演に臨んだのは、社会福祉学部の都築光一・助教授。これまでのフィールド調査、地元関係者との交流を通して得られた知見を交え、人と健康を育む地域社会の大切さを分かりやすく説きました。

仕事場訪問

健康サポートセンター
…［学生相談室］を併設

元気を支える。SOSも受け止める。

体調が、すぐれない…。ケガをした…。そんな時、頼りになるのが健康サポートセンターです。場所は本部棟2階。保健師と看護師が協力し合い、学校医の石川和克センター長（看護学部教授）が診察に当たるなど、きめ細かな対応で学生、教職員に接しています。

「いつでも、気軽に利用してもらいたいですね。健康診断の事後指導、生活習慣病を防ぐためのアドバイス、禁煙サポート、さらにアルコールパッチテストを含め、いろいろな声に応えています。日ごろの健康状態のチェックに役立つ体脂肪計・骨密度計・血圧計などの活用も、お勧めです」（海上長子・主任保健師）

メンタルな事柄、生活や学業の悩み、対人トラブルなどに関しては、学生相談室が相談に応じています。専任の臨床心理士、相談員（看護学部・社会福祉学部の教員）によるカウンセリングが受けられます。ささいなこと、漠然としたことなど、どのようなことでも気軽に相談してください。

君の、その個性が宝もの

ピアいぷが、松尾中学校で思春期保健教室の授業を担当

「私たちは先生じゃなく、みんなの少しだけ先輩。つまり仲間です」

高校受験、そして卒業など大きな節目を控えている中学3年生が温かい言葉を受け止めました。

2月27日、Peer IPU［ピアいぷ］のメンバーが松尾中学校（八幡平市）を訪れています。二人の4年生を含む16名（代表・三上真恵子さん／看護学部2年）に同行したのは、顧問の福島裕子助教授（看護学部）です。「あなたと私のいいとこ探そっ！」をテーマに、思春期保健教室の一環として90分の授業を担当しました。

6～7名の生徒と輪を作って進めたグループワーク。お互いに長所、すぐれている点を誉め合う場面では、それぞれの個性や特長を確認・再認識して心の絆が深まったようです。人格・存在を認めてもらうことは当人たちにとって良い刺激で、自尊感情が高まる契機ともなります。照れ笑いが混じるものの、なごんだ雰囲気の中で語らいを楽しむ表情が印象的でした。

プランづくり、事前の準備や学習、リハーサル、さらに最終調整と、学生が主体になって当日に臨みました。地域に根ざす、学校の現場と協働する機会は貴重です。

多感な中学生の仲間（ピア＝peer）として、おなじ高さの目線で語り合い、一緒に考え、思いを共有する場面で活かされるのがピアカウンセリングの手法です。より前向きに生きるための力を引き出す。そんなアシスト役を務めた学生も、自己の内面的な成長への手がかりを得た実感を深めていました。

※Peer IPU［ピアいぷ］…性・恋愛・自己理解・他者との共生などをめぐる、思春期保健に関心を持つ学生が立ち上げたサークル。中学生や高校生と一緒に「大切なことは何だろう」と考え、思いや悩みを共有するピアカウンセリング、さらに性教育、フォーラムなど学外での活動にも意欲を燃やす。

世界的にも価値ある存在へ

グローバルに思考して地域に生きよう、と確かめ合った《いわて5大学共同シンポジウム》

この岩手で高等教育を担う五つの大学は、それぞれの持ち味を生かして地域に、どのような貢献を果たしていくのか。こうした観点に立ち、次代を見据える大学人が建設的な意見を交わしました。

今回で7回目の「いわて5大学共同シンポジウム」は本学が幹事大学となり、2月3日（土）に開催（ホテルメトロポリタン盛岡・NEW WING）。〝5大学〟に名を連ねるのは本学ほか、岩手大学・岩手医科大学・富士大学・盛岡大学です。

岩手大学・岩手医科大学・富士大学・盛岡大学・岩手県立大学の学長が意見を交わす

平成12年度にスタートした「いわて5大学学長会議」を大学間連携の母体として単位互換、図書館の相互利用が進められました。さらに高大連携、知的資産の活用などで共同歩調を取り、連携を深めてきました。

内への視点×外への視点

話題提供としてスピーチに立った谷口学長は、いちじるしく変わる世界情勢への対応、地域貢献の推進という二つの論点を並列させて大学の在り方を提言しました。

「世界的な大競争にも立ち向かえる人材の育成が分野を問わず急務である。いたずらにグローバリゼーションの表層を追うのではなく、あたたかい心と日本人の美徳を培い、トータルに資質を高めることが諸外国からリスペクト（尊敬）される人材の条件だ。ビジネスや異文化交流の場面では、臆することなく意思表示すべきである。スケールに富む学びを重ねる人ほど、伸びは大きい。それぞれの大学に、価値ある教育研究の素地は整っている」（発言要旨）

未来を志向する隣人として

なお他大学の学長は、次のようなコメントを寄せました。

■「時代のテンポが速まっており、施策を進めるスピード感が必須だ。岩手の大学は競争の局面ではなく、協働と共存をめざして手を携えるべきである。教育と研究の成果を、より明確な形で地域へ還元する意識と行動を先鋭化させよう。5大学を横断的に結ぶ機能を立ち上げる段階ではないか」（岩手大学／平山健一・学長）

■「この春、矢巾キャンパスに薬学部が誕生し、医学部・歯学部を合わせた医療系総合大学となる。教養と人間性に富む医療人の育成、ライフサイエンスに関する知的財産の集積と活用を図る。とくに創業分野では、産学官のネットワークにも加わって活路を広げたい」（岩手医科大学／佐藤俊一・学長）

■「花巻市にある経済・経営系の単科大学として、スポーツ振興にも力を入れて全人的な教育を志向する。地元商店街の再生、格差社会の是正という流れの中で、市民との協働を図って地域経済を元気づけるプロジェクトにも意欲を燃やしている。研究者でもある教員の日常は、あくなき実践モードで活性化する」（富士大学／小山田了三・学長）

■「学内資源を地域や海外へ発信するという目的で、文化・学術情報の提供、地域課題への提言、エリート育成をも視野に入れた高等教育の活性化、団塊の世代を含む社会人の受け入れ、国際交流など具体性を追求していく。五つの大学を結ぶ共通の理念、行動原理が必須であると考えている」（盛岡大学／園井英秀・学長）

生きがいとICTを「つなぐ」私の実践。

社会福祉学部　福祉経営学科　助教授　小川　晃子

シンクタンクの研究員だった頃、老人保健福祉に関するプランの策定に携わる機会が増えたこと。それが、今日に至る直接のきっかけです。向上心に駆られて「もっと専門性を高めたい」と、日本社会事業大学の修士課程（社会福祉学専攻）へ。仕事と掛け持ちで、大学院生として意欲的に取り組んだ成果が『高齢者の生きがい研究』という論文です。

やがて高齢者や障害者の自立支援、社会参画を促す方法としてICT（情報通信技術）に着目。さまざまなライフステージを捉える生涯発達という観点に立ち、情報活用力を身につけたり維持したりする意思をサポートする仕組みの構築などへ、あくなき実践指向を深めてきました。川井村社会福祉協議会、ソフトウェア情報学部・船生研究室と協働して立ち上げた「見守りネットワーク」が一例です。山あいに点在する独居高齢者の孤立を防ごうと、Lモードで安否を確認するシステム。現地に足を運び、その運用効果を評価・検証する継続的な視点も貫かれます。

「ささやかですが、地域づくりに役立つような学際的なプロジェクトは、そこに暮らす人たちの具体的な気持ちや希望に応えてこそ価値を持つのだと思います。よき理解者、そして、それぞれの立場で役割を果たす仲間に恵まれ、フィールドとの結びつきを深める手ごたえが増してきました」

生きがいの創造を視野に入れ、高齢者一人一人のメンタリティーとICT環境との〝つながり〟に帰結点を求める小川先生。近著『高齢者へのICT支援学―その心理と環境調整―』（川島書店）には、さまざまな福祉サービスの情報化へ向けた現場感覚の論稿が収められています。

おがわ　あきこ
1977年3月、東京女子大学文理学部心理学科卒。社会調査会社、シンクタンク、共立女子短大非常勤講師を経て1998年4月に本学へ。日本社会事業大学社会福祉学研究科、淑徳大学大学院社会学研究科・博士後期課程にも学ぶ。福祉情報、地域計画が専門分野。博士（心理学）。担当科目は『社会福祉情報論』『社会福祉計画』『調査技法』。学外活動は日本福祉介護情報学会（理事）、岩手県政策評価専門委員会、総務省「安心・安全な社会の実現に向けた情報通信技術のあり方」に関する調査研究会高齢者等支援ワーキングメンバーほか。

気分はエッフェル塔の下で…。

共通教育センター　助教授　熊本　哲也

エッフェル塔をモチーフに描いたポスターが、研究室のドアに貼ってあります。その前に立ち、快活に話し出す熊本先生。

「フランス語は面白い。フランス文化は奥が深い。それらの具体性を伝えるためには、努めて具体的な素材や方法を用いるべきだと考えています。視点をワイドに広げ、グローバルな枠組みの中でフランスという国を捉えると、その歴史やバックグラウンド、さらに英語圏、スペイン語圏との比較へも知的好奇心は向かうでしょう」

感覚性と論理性を併せ持つ。すなわちラテン系の言語・ゲルマン系の言語、それぞれの系譜を引き継いで体系を織り成す点が、フランス語の特質の一つに挙げられます。この言語を足がかりに、トランスナショナルな語学探究の扉も開けそうです。

「学生からのレスポンスを引き出そうと、小グループに分けて参加型の授業を進めています。コミュニケーションに用いるツールとしても、言葉に慣れ親しんでほしいものです」

豊饒なる映画史に素材を求め、フランス事情を講じる趣向もオリジナル。多彩なコレクションから「お勧め作品」をセレクトし、ストーリー性・手法・カメラワーク・時代性などを語っていきます。リアリティーに富み、社会事情も映す芸術の一形態として映画を論じる。熊本先生は、このようにして学問上の帰結点を示すのです。

くまもと　てつや
1987年、東北大学大学院文学研究科フランス語・フランス文学専攻博士課程前期を修了。フランスのニース大学第三期課程、スイスのジュネーブ大学高等研究課程へ留学した後、東北大学大学院文学研究科フランス語・フランス文学専攻博士課程後期などを経て開学から、本学で「フランス語」「フランス事情」を担当。専門分野は18世紀フランスの思想と文化、ルソー研究、フランス文学研究。日本フランス語フランス文学会（語学教育委員長）、18世紀学会などに所属。

開学の熱き想いを
そして次の10年へ

研究・地域連携本部長　伊藤　憲三

平成10年4月に開学した本学は、この4月で10年目を迎えます。教育全般を振り返ると「優」に限りなく近い「良」であると、我田引水で評価しています。すべては初代学長の西澤潤一先生はじめ、教職員の熱き想いの賜物です。

さて、これから先の10年を、どのように進んで行ったら良いのでしょうか。

拙速の愚は避けたい

ある君主が領地を検分していると、翁が松の苗木を植えていました。

君主が齢（よわい）を尋ねると、翁は「八十五になります」と答えます。それを聞いて笑い出した君主は「立派に育った木材を使う頃には、死んでしまっているではないか」と言いました。すると翁は「とても国を治める人とは思えぬ言葉。私は自分のために松を植えているのではなく、私たちの子孫のために植えているのです」。太宰春台（だざいはるだい：江戸中期の儒学者）の「産語」に出てくる一節です。

どんな事柄でも、成就するには時間を要します。あわただしく出来上がったものは脆く、すぐに壊れてしまいます。10年が適当な歳月かどうかは分かりませんが、一つの区切りにはなりそうです。

とくに大学の評価などは、1年などという極めて短期間でできるものではありません。仮に10年のスパンで考えると、思いのほか気持ちが楽になり、何か大きな成果を挙げられるような気がします。

存在意義を自問せよ

時代の潮流を捉え、本学は地域での存在意義を高めていかなければなりません。そもそも大学における地域貢献とは、何を指すのでしょうか。第一義には、質の高い学生を社会へ送り出すことだと確信します。それを受けて成すべき点は、地域の諸問題に対する具体的な答を出していく思考とアクションだと言えるでしょう。

先日、私は学会の先輩に訊ねられました。「君の大学は次の、どれに該当するか」。すなわち「無くてもよい」「在ってもよい」「無くては困る」の三つから一つを選ばせる厳しい問いかけです。

地域から「無くてもよい」との評価を受けたら…。そう考えると、身の置き場の無い不安を感じます。当然、「無くては困る」であって欲しいのですが、しばらくの間、私は自問を繰り返すことにしました。

智の泉を汲み上げて

あの問いかけを呼び水に、かつて勤めていた研究所の玄関先に刻んであった言葉を思い出しました。「智の泉を汲んで研究し、世に具体的に貢献しよう」。これを本学ふうに解すると、次の通りです。

広く世界に目を向け、智の泉を汲み上げた研究の種を、地域社会の声に耳を傾けて研究する。そうして生まれた成果を具体的な形で還元・提供していく…。

開学の頃。「すべては初めて」という状況で、教職員が一つになって風を起こしていたのを思い出します。ひるがえって今。私たちは、あの熱き想い、必死さを忘れかけているのではないでしょうか。

あらたに始まる10年のポイントは「無くては困る」と望む地域の人々を、いかに増やすか。主役を演じるのは教員であり、学生諸君です。研究・地域連携本部は100%、未来指向を支援します。

したがって平成19年度は、本学が次のステップへ飛び出す準備の年だと位置づけられます。集う者が手を携え、熱き想いを取り戻し、さらなる輝きを分かち合うために。この時代に生起する一つ一つの現象、メッセージと対峙して鋭敏に応え、行動する姿勢から明日は拓けます。

咲かせる想い。私らしく生きていく。

久慈市保健推進課　保健師
佐藤　郁子さん
看護学部［平成18年3月卒］

就ける仕事を探すのではなく「就きたい仕事は何？」と、胸の奥に問う。さまざまな現実と折り合いを付けるのは難しいことですが、みずからの意志を試そうとする気持ちが、自己実現へのエネルギーに他なりません。

かつて佐藤さんは、とある総合病院で小児科と内科の混合病棟に勤めていました。大変さ、やりがいが表裏一体の臨床現場で3年ほど働いた後、3年次へ編入しています。保健師への転身めざして地域看護学を中心に修めるなど、いったん時間をリセットしたのです。

「生活の質を表すクオリティー・オブ・ライフ（QOL）の意味と内容は、人それぞれ。ふだんの暮らしに関するアドバイス、未病に役立つ知恵や情報など必要とされるものも千差万別です。しっかりと地域の皆さんに向き合い、長いスパンでトータルな観点から心身のコンディションづくりに役立ちたい、と私は考えるようになっていました。看護師を極めるという選択肢は捨て難い。でも看護職者として広がりを、と望んで新たなステージを求めました」

あわただしく過ぎた、この1年。いちだんと少子化が進む折、小児医療や子育て環境の充実にも思いを巡らせて母子健診の企画・運営・実施にエネルギーを注ぎました。

歯科医、歯科衛生士と一緒に保育園を訪れ、子どもたちに口腔を清潔に保つことの大切さを説いたり、ブラッシングのコツを指導したりする場面も。さらに大川目という地区を受け持ち、高齢者などからの健康相談へ熱心に応える佐藤さん。「奥が深い仕事なので独り立ちは、まだまだ先です」と、自己採点は辛めです。

はじまりの1年は、駆け足の日々。

財団法人 いわてリハビリテーションセンター　総務課
後藤　将人さん
社会福祉学部福祉経営学科［平成18年3月卒］

「手作業、パソコンへの入力、それからマニュアルや事務規程の確認などなど。デスクワークに没頭していると、時間の経つのが、ものすごく早く感じられました。ふと我に帰ると、もう夕方なのか、という気分ですね。忙しさに負けず社会人の心得を身につけ、仕事を覚えました」

はじまりの1年を振り返る後藤さんは、リハビリテーションの専門医療を担う職場で事務部門のスタッフです。

給与・厚生年金・雇用保険・福利厚生などを担当し、およそ130人の職員が安心して働ける環境を、と陰ながら支える立場です。すみやかさ、正確さを旨として責任を果たしている充実感が表情から伝わってきます。その仕事柄、カレンダーに見入る場面が多々あります。締め切りから逆算してペース配分を決め、スケジュールを管理するコツを覚えました。給与振込の件で最寄りの金融機関へ、あるいは保険の手続きで社会保険事務所へ、というように外回りも日常的な動きです。

後藤さんにとっては、1週間ほどの看護実習が職場へ順応する良き契機だったようです。就職して間もない5月、看護部の看護師がチューター役を務め、患者さんとのコミュニケーションを中心に学びました。「入浴や着替えの介助、配膳の手伝い、さらに夜勤を実体験して現場の様子を具体的に知りました。元気になろうと一生懸命な姿に接しながら、臨床の仕組みや役割を理解できた意義は大きいですね。新人として顔と名前を覚えてもらえたし、どんな仕事でも人と人の結びつきが肝心だ、と納得した次第です」

IPUに言いたい

「人づくり」の種よ、大きく実れ。

岩手県知事
増田　寛也

21世紀を見据えた人材づくり

平成10年4月に開学した県立大学は、この春で10周年を迎える。

私が知事に就任したのは、県立大学基本構想が策定された直後の平成7年4月である。これまでの3期12年は開学準備に始まり、平成10年の開学、平成12年の大学院開設、平成14年3月の一期生卒業、そして平成17年4月の法人化など県立大学の歩みと重なっている。

県立大学設置の決定は、故・工藤巌前知事の英断だった。建学に当たっては21世紀を見据えて少子高齢化、高度情報化、グローバル化が急速に進む中、国際的な視野を持ちつつ地域に立脚し、地域に誇りを持って真に豊かな地域社会を形成する人材の養成・確保が必要と考えたのである。県内外の著名な学識経験者の方々等に、さまざまな角度から構想を検討していただいた。

その結果、人間尊重の精神の涵養や実学・実践などを大学の基本的な方向と定めた。また学部の構成は、地域の保健医療を支える人材を育成する看護学部、豊かで活力ある福祉社会の実現に寄与する社会福祉学部、情報化の著しい進展に対応するソフトウェア情報学部、総合的な問題解決や政策立案の能力を備えた人材育成を志向する総合政策学部とした。

多面的な学びがもたらす成果

20世紀から21世紀への橋渡しを、という大きな節目に「自然」「科学」「人間」が調和した新しい時代を創造する「人づくり」の種を蒔くことができたと考えている。

また、成果が現れるのに時間がかかると言われる教育において幸いにも県立大学の「人づくり」は、種から萌芽が見られると感じている。

例えば、卒業生の就職率は開学以来、北海道・東北地区の大学の平均より高い水準で推移している。この実績は、各学部の目指す人材像が明らかなため、多くの学生が自分の将来に対する明確な目的意識をもって入学し、在学中に必要な専門知識・技術を修得しているからだと考える。また語学や情報処理、教養教育の充実など、専門領域以外での強みが身につくよう力を入れてきたのも一つの要因であろう。

草創のスピリットを受け継ぐ

新設大学のため実績がなく、その反面、大きな可能性を秘めた県立大学が今日の評価を得ているのは、初代学長を務めた西澤潤一先生のリーダーシップに負うところが大きいと考える。

西澤先生は、昨今の知識偏重教育の現状を憂い、機会あるごとに、独創性と地域に密着した学問の大切さを説き、有為な人材育成に力を尽くされた。教育内容についても、西澤先生が目指す実学・実践教育を具現化したソフトウェア情報学部の「1年次からの講座配属制」が文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に選ばれるなど、県立大学を全国へ強くアピールできた貢献度は計り知れない。

こうした着実な歩みの一つひとつが、昨年8月に県立大学が卒業生の採用企業等を対象に行ったアンケートに結びついている。それによると「企業等の約85％が満足」という結果が出ており、とても喜ばしく思われる。

岩手らしい自立へ向かって

建学に際して21世紀を見据えた諸課題は現実のものとなり、時代は、さらに大きく変化しようとしている。

本格的な人口減少や高齢社会の到来も、その一つである。わが国は平成17年から人口減少社会に突入しており、経済や財政へのマイナスが懸念される中、地域づくりをどう進めていくかが大きな課題となっている。

答は、すぐに出るものではない。しかし、これまで私が絶えず目指してきたものは、岩手の美しい自然や豊かな資源、世界に誇れる歴史や文化、厳しい環境の中で育まれてきた生活習慣や結いの精神など、岩手ならではの素晴らしい財産や可能性を生かした「岩手らしい地域の自立」の実現にある。

地域の自立を実現していくには、まず価値観の転換が必須となる。経済的利益や効率性を追求する、これまでのような画一的な次元から離れて県民一人ひとりが地域を見つめ直し、そこから新たな価値の創造が始まる。

また、制度的には全国一律の規制や基準等から脱し、地域が自らの権限と責任で創意と工夫を凝らしていけるよう、地方分権改革を一層進めるのも不可欠である。

その一方で私たちが活力を保持し、経済的な自立を進めるために、経済のグローバル化が加速度的に進展する国際社会にも、しっかりと目を向けていかなければならない。

変化の激しい時代だからこそ、より開かれた視野で物事を捉える姿勢が欠かせない。いわば、こういった優れた資質を持つ人材を多く抱えるということが地域の強みになる。

挑戦してこそ得られる人生の糧

時代の潮流を踏まえ、学生の皆さんは次の二つの点を心がけて大きく可能性を広げよう。

まず強調したいのは「チャレンジ（挑戦）」。社会に出ると、常に結果が問われる。挑戦した結果、失敗か成功かは自分の責任となる。そういう意味で、学生時代は多少の失敗も許される時期である。この特権を最大限に活かし、自分を磨く姿勢が欠かせない。

もう一つは「リスクテイク（リスクをとること）」だ。

安全・安定だけを求めると、社会に出たとき、著しい国際化の時代を生き残れない。人間は、一度失敗すると体で覚える。体で覚えると同じ失敗をしない。これが「自ら学ぶ」ということである。自ら学んだ経験は、教科書だけで学ぶのとは違い、その人の貴重な財産になる。

積極的にリスクをとって、いろいろなことに挑戦し、将来的には地域・岩手のみならず、日本あるいは国際社会で活躍できる人材へ、と強く願うものである。

県立大学の使命。それは、社会のさまざまな課題に幅広く対応できる優秀な人材の確保・育成を目的として質の高い教育・研究を行い、これらを通じて地域社会、国際社会へ貢献していくことである。さらに大きく時代が変わっても、この使命は普遍的な意味を持つ。

谷口誠学長の下で教職員が一丸となり、新しい時代を創造する人材の育成が図られると期待している。これまでの歩みを礎に「人づくり」の種が大きな実を結ぶよう、県民の期待に応え、さらなる軌跡が描かれると信じている。

じぶん時間

大地に春を呼んでみよう。

総合政策学部　環境・地域コース／3年
皆上（みなかみ）　優季（ゆき）

昨年10月なかば。ゼミ仲間の協力を得て皆上さんは、ススキが茂る一角に10数センチメートルの苗木を植えてきた。高さ3メートルほどに育つ落葉低木、アキグミを40本。2メートル四方の区画が10個ならぶ実験区で、根づき方（活着度）を調べようという試みの始まりだ。

しかし、現地の自然条件は厳しい。吹きさらしの地形を季節風が駆け抜ける。ほぼ半年の間、地面は大量の雪で覆われる。

「幼い苗木は大丈夫かな、と気がかりな日が続きます。今は生命力を信じ、すこしでも早く、元気な姿を確かめに行くつもりです」

科学のココロで大地と対話

赤い実を結ぶアキグミは、肥沃とは言えない土壌にも根づきやすい。いわゆるパイオニア樹種の一つである。冬を前にして葉が落ち、それらが土に還って養分を富まし、土壌環境を整え、さまざまな生き物を呼び込んでは活かしてゆく。

「どんなプロセスを辿って生物多様性が確保されるのか、学術的に価値あるケーススタディーとなるでしょう。継続的な観測を心がけ、こまめに足を運んで良質なデータを積み上げます。あのフィールドが示す事実の分析と検証を通し、かけがえのない自然界と共生するための手がかりを得たいのです」

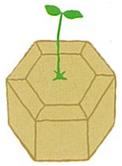
再生を願い、人間の務めとして大地を彩り、大地から学ぼうと欲する皆上さん。アキグミの生育ぶり、それを取り巻く植物相の変化を捉える卒業研究の構想は固まった。

次代へ贈る、ちいさな苗木

この雪が消えたら、と皆上さんが期していることがある。新緑の頃、そして夏から秋へと、かなりの回数を重ねることになるだろう。

フィールドワークの行き先に決まっているのは、八幡平。かつて、硫黄の採掘で隆盛を極めた松尾鉱山の跡地だ。なかなか木の生えない荒野。従業員と、その家族が暮らしたアパート群は朽ちるまま。標高1000メートルほどで、雲上の楽園と例えられた場所が産業遺産とも言える佇まいを呈している。

バイオブロックで分かること



八幡平の植樹で試験的に導入したアイテムが、バイオブロックだ。それは六角形の段ボール函で、培養土を満たして苗木を植え込む。培養土が風で飛び散るのを防ぎ、根元を保護するフタを上面に被せる。

じかに地面へ植えるのと比べ、風によるダメージを受けにくい。また函そのものが、土に還る素材で造られているエコ仕様なのだ。

いくつかの対照実験を行えるメリットは大きい。まず、バイオブロックの使用と不使用という二つの条件を比べられる。あるいはバイオブロックを地面に埋めるパターン、そのまま地面に置くパターン。さらに板張りの防風柵の有無で活着度は、どう変わるのか…。

使用例そのものが少ないバイオブロックの実験データは、これから蓄積されていく段階にある。もちろん、その有効性に関しても未知数だ。つまり皆上さんの実証研究を通し、あらたな知見が生まれる可能性は高い。

異なる生育環境でのデータを集めるため、キャンパス西側に〝平野部〟の実験区が設けられた。カラマツの防風林と接する芝地には、それと分かるようロープが張られている。

想いは行動で表してみる

「できることから、コツコツと。生命の環と謙虚に向き合いながら、自然界にとって望ましい働きかけを重ねていきたいものですね」

すでに高校生の頃から、皆上さんは里山を豊かにする活動へ興味を示していた。実家から、そう遠くない矢越山（一関市）にコナラ・ミズナラなどを植えた思い出がある。

そして大学に入ると、アンガージュマン（社会参画）への意欲は新たな段階を迎える。

松尾鉱山の跡地に森を再生させよう、という市民協働型プロジェクトに共鳴したのが2年次の夏。みずから機会を求めてメンバーに加わった。ブナやハンノキの植林作業を進めるため、しばしば現場に赴く。それなりに体力も要したが、少しずつコツを習得した。ちなみに、卒業研究に用いる実験区ならびにアキグミは「皆上さんの学業に役立ててほしい」と、関係者の厚意で提供された。

みんなで有機農法事始め

皆上さんが所属する自主ゼミ「Grish」は、身近なことから環境問題やエコロジーの大切さを考えたり実践したりする有志の集まり。活動の一つとして、有機農法の実践がある。

大学祭の折に集めた生ゴミを堆肥の原料へ、というアイデアだ。90リットルに対して納豆1パック、さらに適量の米ぬか・お湯を加えて混ぜる。大きなポリバケツに入れておくと、発酵が進んで畑で使えるようになる。

2006年、手づくり堆肥を使って初の栽培にトライした。構内に拓いた畑のネーミングは、Grishガーデン。イチゴ・メロン・ジャガイモ・大豆・トウモロコシなどを植えてみた。

「まずは段階を踏みながら、地味を肥やしていきましょう。あまり結果を急がず、時間の流れに委ねるという方法も考えられます」

岩手山の裾野で資源循環型の農業に取り組む指南役の人は、こんなアドバイスを送ってくれた。

小動物に食べられたり、長梅雨で日照不足だったりして思うような収穫を得られなかったのが心残り。けれども2年目からの実りに向け、あれこれと活かせる勉強を積んだ。また「ささやかでも良いから何かが変わる、きっかけを」という想いを仲間と分かち合えた。

「うわべのイメージ、流行には囚われたくない。あくまでも、環境を巡る本質的な理解を深めようと望んでいます。いろいろなフィールドに立つことで視野が広がり、感性は磨かれ、探究心を駆り立てられます。実践への糧を得る中で、そんな思いが強まってきました」